

子ども会(学習会)だより

MY SKY No. 30



1998年1月20日火曜日発行(毎週火曜日きまぐれ発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責・吉成正士

今年度も残り2ヶ月たらずとなりました。そこで、保護者・先生のみなさん方にお願ひがあります。

以前3年生が学年通信でやった「保護者からの手紙」の真似をして、「子どもへ贈る私の手紙」というコーナーを設けようと思うのです。3年生のことを3年生だけのことにしておくのはもったいないと思うし、他学年にも、もっともっと子どもに知ってもらいたい親の思い、先生の思いってあると思うんです。希望者だけで結構ですので、今回一緒に配布した用紙に書き、学級担任を通じて届けてもらえればと思います。(用紙は配布したものにこだわらなくても結構です)この機会に、日頃伝えられていない言葉を、保護者も教師も一緒になって子どもたちに贈ろうではありませんか!テーマは何でも結構です。

テーマ例「私の体験談」「人間としての生き方について」「家族・友人について」「人権・差別について」「ふるさとについて」「子どもたちに贈る言葉」

文章は全く修正せず載せようと思いますが、もし「校正」「ワープロ打ち」を希望する方がおられましたら、その旨お伝えください。締め切りは特に設けません。

なお投稿多数の場合は私の方で選ばさせていただきますが、あしからずご了承ください。



☆ 「どうしてそこまでやるの?」……私はいったいどうなっていくのだろう?……

前号の内容について少なからず反応があったようで、私自身うれしさを感じています。特に「どんぐりの家」については、映画チケット(券)を買いに来てくれた子もいたり、マンガ本を買って家族で読んでくれる子もいたり、マンガ本を読んでくれる先生方がいたりで「ああ、関心持ってくれてる人もいるんだなあ」と感慨深いものを感じてました。本当にうれしい限りです。

実は私自身、板野町手話サークルすだち会に入って4年目になるのですが(年はかたがた手紙はくできません)、障害者問題について学ぶことは本当にたくさんあります。

また、板野中学校が毎年行っている板野養護学校との交流学習も、本校に来た7年前からずっと関わっていますが、これも本当に学ぶことが多いものです。なかでも、7年前に

養護学校の子たちと一緒にやった道德の授業は、これからも決して忘れることはできないでしょう。授業の中で、障害をもったある子が言いました。

「僕が小学校にあがるとき、おばあちゃんがランドセルを買ってくれました。うれしくてうれしくて、ランドセルを背負って学校に行くことを本当に楽しみにしていました。」

でも、僕は地元じもとの学校には行かなかったので、ランドセルを使うことはありませんでした……。

僕には弟がいるんですが、何年かたってその弟が僕のランドセルを使うことになりました。僕は悔しくて辛かったです。僕も自分のランドセルを背負って、みんなと一緒に地元じもとの小学校に行きたかったです……」

かなづちで頭なぐを殴られたような気分でした。養護学校の先生方もそんなことは初耳はつみみだったらしく、驚おどろいていました。

「どうも私には、知らないことがいっぱいあるらしい……」

その時私は、頭はだでなく肌で、そう感じていました。

その後も障害者について考える機会に恵まれてきたわけですが、今私は、

「障害者問題も部落問題と同じで、

『運動』というレベルにまで高めなければ、解決は難しい」

と思っています。日本人は、他国たこくに比べ「運動する」という歴史にあまり恵まれなかったため、「運動」の習慣しゅうかんせい性が大人ですらあまりありません。まして子どもはもっと少ないでしょう。しかし「運動」がなければ、御上おかみからのお恵みに頼るしかないわけで、その御上たよが私たちのことを本当に思い、その良き日を願っているなら何ら問題はないのですが、みなさんご存じのように、御上おんを含めた政治・経済をリードしている人々の中には、いろんな問題を起こした人々がたくさんいるのが現実です。すべてのリーダーに問題があるとは言いませんが、どうも自分の利益りえきに埋もれてしまい、ジコチューじこちゅう（自己中心主義）になっている人が多いような気がするのです。ですから私たち国民は、社会におけるいろんな「運動」の歴史を学ぶ中で、当然の権利を主張しながら、当然の義務も果たし、自分たちの生活や平和を守るため、不断ふだんの努力を「運動」という形で果たさねばならないように思うのです。

しかし障害者に対しての取り組みは、障害を持ってない人の中で決まっていますし、また女性に対しての取り組みも、ほとんどが男性の中で決まっています。本当にこれで、充分な社会きずが築けるのでしょうか？

性問題についての身近な例として、

「女性は子育てに専念すべきだ！」

という考えがあります。確かに働く女性は、昔に比べて格段に増えました。しかし自立できているかという点、まだまだという感じがあります。では自立するにはどうすればいいのでしょうか？その一つは「給料を手にする」ということだと思います。家にこもらされ、家事育児に専念させられ、しもべのように働かされるということは、自立の道を閉ざされてるということに等しい気がするのです。家事育児もいいでしょう。でも、

「女性は家でいるものっ！」

という昔ながらの考えを逆手にとり、それに甘んじた生活を謳歌している女性もいます。嘆かわしい限りです。女性を責めているわけではありません。それを許してしまっている男性を責めているのです。

職場にしても、男性、女性かたよってないでしょうか。給料に差はないでしょうか。女性の校長先生、教頭先生はどのくらいいるでしょうか。社会のいろんなことが決まってく、国会議員、県議会議員、市・町・村議会議員の中ではどうでしょうか。だから女性の社会進出ができていないのではないのでしょうか。まだまだ意識の面でも制度の面でも大問題というわけです。小・中学生の時に活発な女の子って結構多かったのにね……。

実はうちのうちは、今でこそ育児に専念していますが、それまでは看護婦として病院に勤務していました。その頃私の目には、日頃の彼女はボーっと(?)しているように映っていました。でも、勤務に病院へ入っていくときは、背筋をピンと伸ばしてスタスタと歩行くのです。私はその後ろ姿を見るのが好きでした。何か凛としていて、まるで精神が清められているかのように見える彼女が好きでした。

「復職して、またその姿が見られるといいなあ」

と実は思っていたりしてます。

あれこれと話が飛んでますが、ある時、ある人から、こんなことを言われました。

「部落問題、障害者問題、福祉問題、環境問題といろいろしよるみたいやけど、

最終的にお前はどうなっていくんだろうなあ」

確かに私自身、

「これからの日本は人権・環境・福祉の時代だ！」

なんて言っておきながら、幅広く見すぎてこれから自分がどうなっていくのかなんて、てんで見当がつかえません。でも、今のまま自分のペースでやり続けていくことに変わりはない

いと思いますし、たとえこの先、大きな問題におち当たってしまい、今の生活すら保障できないようなことになってしまっても、おそらく私は突き進んでしまうでしょう。もしかすると、家族にも心配や迷惑をかけてしまうかもしれません。でもその時はその時で、押しつけず、背負い込まず、協力してやっつけていこうと思います。

先日の成人式の日、5年前に板野中学校を卒業した子たちと同窓会をしました。月日は流れても、彼ら彼女らはあの頃と変わらず、同和教育という絆で、全体学習で確かめ合った気持ちのままでいてくれたように思います。

「教育は人なり」「教育こそが人を生かすもするし、殺しもする」

ということ、今の二十歳の青年に見せつけられたように思います。

私は子どもを育てていく中で、私自身も育っていけるような教育をしてみたいのです。何も分かってない若僧が夢や戯言を言ってるように思えるかもしれませんが、それでも夢を捨てることなく、やっていきたいとします。本当の意味での共生社会を築き上げていくために！

「どうしてそこまでやるの？」

よくきかれるこの問いに、これから私はこう答えようと思います。

「ようわからんけど、やりたいけん、やらなんたら気持ち悪いけんやっている」



今回のMY SKY, 本当にひとりごとになってしまいました。

- 1月24日(土) 「夏少女」上映会(14:00～；文化の館さくらホール)
- 26日(月) 「どんぐりの家」第1回上映会(10:00～14:00～18:30～；郷土文化会館)
- 28日(水) 解放子ども会(18:00～7:30；総合センター)
- 〃 第3回板野養護学校交流会
- 29日(木) 第6回鳴教大 教育・文化フォーラム「人間尊重を基底として『生きる力』を育む教育活動の展開」(14:00～；文化の館)
- 2月5日(木) 第1学年第4回全体学習(1年D組資料「自分以下を求める心」)
- 6日(金) 「同和教育・部落問題」勉強会(19:30～；郡頭教育集会所)



部落の伝承十話

山の粥 後編

その年は食べるものがなくて餓死する農民がたくさんいた。農民は道ばたの草の根までほって食べたが、ほとんどえいようにならず、つぎつぎと死んでいったという。

そんなある日のことだった。日名倉山のふもとの村の藤べえじいさんが、まごの平介をよんでいった。

「平介や、この書きものをお百姓の年寄り役にとどけてきなさい。これには、日ごろのお札に山の粥をよういしました。月のない深夜、わたしたちの村にきてくださいと書いてある。おまえも人目にふれないよう気をつけていきなさい」

おじいさんはそういつて、一通の手紙を平介にわたした。

手紙をもってはしりながら平介は、五年前にも同じことがあったのを思いだす。

五年前も平介が手紙をはこんだのだった。そして、その夜おこったことを今でもわすれることができなかった。平介が里の農村に手紙をはこんで夜がふけたころ、赤ん坊をだ

たり、年寄りをせおった農民がそろそろと村にあがってきた。平介はびっくりした。へいぜい農民は、平介の村の者をきらつて村にはいつてくることはなかった。それどころか、平介の村の者が、農村にいつてものをたずねても、口をきかない者がいたし、農民の家にはいることなど、ぜったいゆるさなかった。そんな農民がその夜は腰をかかめ、ものこいするように、平介の村にやつてきて、村中の家の前にならんだ。

そのとき平介の村は、どの家でも山の粥をつくつていて、家に来た農民にふるまった。

農民たちはなん回もなん回もお札をいつて粥をすすった。なかには涙をながしてよるこんでいる人もいた。お乳がでなくなつたお母さんが、山の粥をすすると、たちまちお乳がでた。餓死すんせんの子どもでも、たちまち顔に赤みがさすのだった。

五年後のその夜も同じことがおこった。

農民たちはひとつずつ茶碗をもっていて、それに山の粥をいれてもらつてすすった。するとぐつたりした老人でもすぐに元気になるのだった。

藤べえじいさんの話によると、じいさんの子どものころにも一回同じことがあつたという。

平介の村では、なん日もなん日も、山の粥をつくつた。そして深夜になると、里の農民がきてそれをすすつていった。

十日ぐらいたつと、だれの目にも農民がもとの元気をとりもどしているのがわかつた。でも平介の村ではつぎつぎと山の粥をつくつた。その年は、里の農民の話をきいて、遠くの村の農民がやつてきたのだった。平介の村ではそんな人をつぎつぎとむかえた。

そうしているうちにふたたび雨がふりはじめた。農民は田圃にもどり、日名倉山はいつもの実りおおい山にもどつた。

平介の村の人たちはその山をまい日見まわり、枯れ木のそうじをしたり、きずついた動物をたすけたりした。

山の粥というのは、お城に肉をはこんだあと、のこつた動物の骨や内臓をにつめてつくつた汁のことだった。今でいうスープだった。動物の肉は塩漬けやみそ漬けにしてお城にとどけ、のこつた骨や内臓でスープをつくつた。そしてそのときとれた毛皮は、ほして太鼓や馬具にした。このような技術を平介の村の人たちが長いあいだかかつてつくりあげ、つたえてきたのだった。

おわり